

特 集

「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」

本特集は、「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」に焦点を当てたものである。現在、大学における教職課程（英語科）は、文部科学省が定める「コア・カリキュラム」に基づいた内容を授業で扱うことが求められている。そこで、西南学院大学外国語学部の教職課程（英語科）において、英語学・英語科教育の科目を担当する教員4名（ベノム ケリー、中西 弘、谷川 晋一、伊藤 彰浩）は、今後の教職課程（英語科）について協議を行い、各自が「中・高等学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」の「2. 英語学」で求められている学習項目③「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」の内容に対応した研究業績を積み重ねることにした。大学において教職課程を維持・発展させるためには、自らが担当する科目の内容に関する活字化された教育研究業績が必要となる。これは、教職課程に参画する教員に、研究者として学会等で厳しい査読を受けた後に掲載される学術論文の執筆とともに、自らが教職課程で担当する科目で求められる内容に適合した教育研究業績を積む必要があることを意味する。

ベノム論文は、20世紀中期から後期にかけてのアメリカ英語における文化的変化と言語的变化の関連性を扱っている。特に George Carlin が提唱した soft language（間接的な表現を通じて人間の経験の重要な側面を隠す婉曲表現）に注目し、その出現頻度を2つのコーパスを用いて定量的に分析した。Carlin の主張は概ね支持されたが、soft language が人間の苦痛を隠すという彼の主張には疑問が提起され、言語の変化と文化的変化の関連を洞察する意義について論じている。

中西論文は、有声性・無声性を特徴づける重要な基準のひとつである Voice Onset Time (VOT)（破裂音の解放から声帯振動の開始までの時間）を取り上げ、Lisker & Abramson (1964)、Cho & Ladefoged (1999) などの研究を参考

に、世界の様々な言語の VOT を概観し、普遍的な傾向と個別言語の特性について検討を加える。そのうえで第 1 言語が第 2 言語の VOT に及ぼす影響について先行研究を概観し、日本人英語学習者を対象に実施した英語 VOT に関する実証研究の結果について考察を加えていく。

谷川論文は、現代英語における非標準的動詞 s 標示（例：I loves you）と単数代名詞 they（例：Smith_i says they_i want to see you）に焦点を当て、英語の歴史の変遷と地域変種の観点から、それらが持つ社会的意味の考察を行っている。非標準的動詞 s 標示では、カナダのニューファンドランド地域で当該 s 標示が女性やドラッグクイーンといったジェンダー特性を示す機能を持っている事実を見た上で、当該 s 標示が日本語の終助詞ワ・ヲヨに近い役割語としての性質を帯びている可能性があることを論じている。単数代名詞 they では、かつての英語で認められていた they の単数用法が現代英語で復活し、近年では、ノンバイナリーなジェンダー特性を持つ人物の指示用法が広く認められるようになっており、ジェンダーの多様性に対応する単数代名詞として they が標準化していることを論じている。

伊藤論文は、近年の第 2 言語習得研究において 3 単現 -s が獲得の難度が高いと考えられていることを紹介し、その一方で、英語科教員による 3 単現 -s に関する認識がほとんど取り上げられていない点を指摘する。教職課程（英語科）を履修者を対象に 3 単現 -s に関するアンケート（自由記述方式）を実施し、その分析結果を基に、標準英語における 3 単現 -s という文法規則が存在する理由を、文法的機能面だけでなく英語の歴史からも説明する必要性を論じている。さらに、3 単現 -s の規則が用いられる標準英語の成立過程を記述し、英語の歴史の変遷と国際共通語としての英語に対する意識を高めることが、大学の学びの中で科目間の内容を結びつけるためにも不可欠であると結論づけている。

本特集の論文が広く読まれ、執筆者が互いに励まし合いながら教育と研究に邁進する中で、教職課程（英語科）の維持と発展に貢献できることを願っている。

最後に、本特集の企画を応援してくださった外国語学部の同僚の先生方、教職課程（英語科）のカリキュラムの現状について情報を提供してくださった教

務課副課長の宮永静さん、そして、論集の編集をしてくださった学術研究所事務室副課長の野口建さんに心から感謝申し上げたい。

特集「英語の歴史的変遷、国際共通語としての英語」

編集責任者 伊 藤 彰 浩